

三田山上に残るイサム・ノグチの芸術

20世紀を代表する日系米国人の彫刻家、イサム・ノグチ。
2021年8月29日まで東京都美術館で開催された『イサム・ノグチ発見の道』では、
迫力ある大型彫刻や光の彫刻「あかり」を用いたインスタレーションが来場者を魅了した。
父親を通して慶應義塾に「縁」を持っていたノグチ。その波瀾万丈な人生と
今も三田キャンパス南館に残る「旧ノグチ・ルーム」について紹介したい。

日米のはざまで揺れた そのさすらいの人生

イサム・ノグチ (1967年撮影)



イサム・ノグチは1904年、米
国・ロサンゼルスで生まれた。父は
慶應義塾大学文学科出身の詩人
(後に文学科教授)・野口米次郎、母
は米国人作家のレオニ
ー・ギルモアで、父は間
もなく日本に帰国。19
07年に母はノグチを連
れて米次郎のいる日本に
渡るも、米次郎は別の日
本人女性と家庭を持って
おり、最終的にノグチは母
と共に暮らすことになる。
1918年、母の意向
で単身米国へ渡った。著
名な彫刻家に弟子入りし

て芸術家を志すも迷いが生じ、19
23年にはコロンビア大学医学部進
学課程に進学。医学の道を模索する
ようになる。その際に知己を得たの
が野口英世だった。米次郎が米国で
講演旅行をした際、同姓の縁もあつ
て交流が生まれたことから、英世は
その息子にも親身に接した。ノグチ
が「医者か？芸術家か？」という人
生の選択について英世に相談すると、
英世は「それは芸術家の方が偉大で
ある」「父のような芸術家になれ」と
背中を押したと伝えられている。
1924年、ニューヨークの美術
学校で本格的に彫刻を学び始め、翌
年には彫刻展を開催するなど彫刻家
としての地歩を固めていく。192
7年にはグッゲンハイム奨学金を得
て、パリへ留学。その後、舞台装置

の製作やメキシコでの壁画制作等を
経て、国際的な新進芸術家としての
地位を着実に確立していく。ノグチ
が再び日本の土を踏むのは1931
年、その際、複雑な感情を抱いてい
た父との再会を果たしている。

教授だった父との縁で 慶應義塾に傑作を残す

1949年よりボーリンゲン財団
の助成で欧州、エジプト、インド、イ
ンドネシアなどを訪問していたノグ
チは、翌1950年に19年ぶりに来
日。日本の芸術家や建築家に歓待さ
れ、戦後復興期の日本で多くのプロ
ジェクトに参画した。そのうちの
一つが三田キャンパスの第二研究室の
談話スペースの空間デザインだった。
慶應義塾は第2次世界大戦中の空

新萬來舎内部（1950年代撮影）（右）
（福澤研究センター提供）
庭園（2003年撮影）（左）



て制作に着手。1951年の竣工後、コンクリート、石、木、鉄など多様な素材で構成された斬新な空間デザインと、隣接する庭園に設置された《無》《若い人》《学生》の3つの彫刻作品は大きな話題を呼び、モダンイズムデザインの傑作との評価を得た。この「新萬來舎」とも呼ばれた

に委ねる。
ノグチは谷口の「新萬來舎」構想に共鳴し、1947年に病没した父を記念するスペースとも感じて制作に着手。1951年の竣工後、コンクリート、石、木、鉄など多様な素材で構成された斬新な空間デザインと、隣接する庭園に設置された《無》《若い人》《学生》の3つの彫刻作品は大きな話題を呼び、モダンイズムデザインの傑作との評価を得た。この「新萬來舎」とも呼ばれた

襲で多大な被害を受け、1947年の創立90年を契機に当時の潮田江次塾長が建築家の谷口吉郎に校舎復興を委託していた。大学内の人々の自由な交流の場として1876年に建てられた萬來舎もその一つ。谷口は演説館に隣接する旧萬來舎跡地に第二研究室の庭園と談話室を萬來舎を引き継ぐものとしてよみがえらせ、福澤の精神を新しく継承することを目指した。谷口はその空間デザインを潮田塾長から米次郎の息子として紹介されたノグチ

「ノグチ・ルーム・アーカイヴ」 360度パノラマムービー画像公開中

慶應義塾大学アート・センターでは、「ノグチ・ルーム」の移築計画以前からその芸術的・文化財的価値に注目し「ノグチ・ルーム・アーカイヴ」プロジェクトを進めていた。Webサイトでは移築前の室内と庭園を360度パノラマ撮影したムービー画像を公開している。



パノラマムービー

無料オンライン講座「旧ノグチ・ルームへの招待：大学における文化財の保存と活用」開講中！

「旧ノグチ・ルーム」をケーススタディとして取り上げ、大学における文化財の可視化と保存、活用可能性について考えていく講座。



FutureLearn 講座

最終的に解体は実施されたが、ノグチ・ルーム部分の室内空間と設備を当時理工学部教授であった隈研吾氏、庭園部分を環境デザイナーのミシェル・デヴィーニユ氏が担当し、新たな空間として再生させることになる。2004年、南館3階のルー

空間は、やがて「ノグチ・ルーム」の名称が定着することになる。
**文化財保護の議論の末に
再生された「旧ノグチ・ルーム」**
それから約半世紀後の2002年、三田キャンパス南館建設のため第二研究室の解体が決定した。その際、「ノグチ・ルーム」の保存をめぐり、ニューヨークのイサム・ノグチ財団を含め、学内外で議論が起こり、社会的にも注目されることとなった。

フテラスに建物と《無》が設置され、《若い人》と《学生》は南館1階で展示されることとなった。
移築・復元されたその空間は現在「旧ノグチ・ルーム」と呼ばれている。建物内は通常は非公開だが、定期的に公開イベントが行われ、ノグチの芸術に接する機会を提供している。



南館3階のルーフトラス